



TITLE:

<學界展望>シュリーヴィジャヤ研究の動向：文字資料と考古學資料の落差

AUTHOR(S):

深見, 純生

CITATION:

深見, 純生. <學界展望>シュリーヴィジャヤ研究の動向：文字資料と考古學資料の落差. 東洋史研究 1981, 40(3): 548-561

ISSUE DATE:

1981-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153833>

RIGHT:

學界展望

シュリーヴィジャヤ研究の動向

——文字資料と考古學資料の落差——

深見 純生

一 はじめに

二 研究史

三 バレンパンの發掘——大國イメージへの疑問と「マレー型

社會」

四 五箇年計畫

一 はじめに

中國資料中の地名の原音と位置の比定が、東南アジア古代史の研究に大きな位置を占め、多くの論争が重ねられている。地名比定が歴史研究の目的でないのは自明のことだが、その重要性は、たとえば長安の位置が華北か華中か不明な場合の中國史の混亂を想起すれば十分理解しうるであろう。しかし地名比定の諸説は多くの場合、對應する現地史料の不足のゆえに永遠の假説にとどまらざるをえない。シュリーヴィジャヤ史の場合まさに都の位置を問題にしなければならぬが、むしろこの弱點ゆえに新しい方法論の開發の可能性が秘められている。

シュリーヴィジャヤ(Srivijaya)は一般に、唐代中國資料に「室利佛逝」、宋—明代に「三佛齊」と記される、七世紀後半から一三世紀後半(ないし一四世紀後半)まで東南アジア島嶼部(マレー半島を含む)の西部に存在した大國と考えられており、都の位置については諸説あるが、一一世紀半頃までバレンパン、以後はジャンビとするのが一應の通説である。この國は東西交通の幹線上に位置し、海上交易活動およびその支配に主な基盤のある海上交易國家の代表例とされている。また古代の東南アジアにおいてクメール帝國に匹敵する程の繁榮を誇った國と考えられ、現在のインドネシアではジャワのマジャパイトと並んで古き榮光の時代の體現者とみなされている。

本稿では一〇世紀以前の時期を中心に、シュリーヴィジャヤに関する研究の動向を紹介し、あわせて若干の問題點を指摘したい。近年十指に餘る研究が發表されている中でとくに注目されるのは、上記の如き大國イメージに疑問が提起されていること、新しい方法論の開發の必要性が強く意識されていることの二點である。この動向の背後には、カンボジアやジャワには多數の、壯大な遺物、遺跡があるのに對して、スマトラとマレー半島にはそれが非常に少ないという事情がある。現地資料の少ないことが研究の最大の障害であるだけでなく、この少なさと外地の文獻におけるシュリーヴィジャヤの盛名との間の落差の大きいことが研究者を悩ませている。先の二點の前者はこの落差を前提に議論を展開しようとし、後者はこの落差を埋めることをめざすものと言える。次にまず研究史の概略をごく簡単に見ておきたい。

二 研究 史^(a)

(1) セデス

シュリーヴィジャヤは周知の如く、セデスの一九一八年の論文によつて「生き返る」まで、長く人々の記憶から忘れ去られていた。

セデス論文は「室利佛逝」、「三佛齊」、アラブ資料の「Sribuza」を、コタ・カプール碑文（六八六年）、リゴール碑文（七七五年）、南インドのチョーラ朝の刻文（一一世紀）に見える「Srivijaya」に同定し、七世紀から一三世紀まで續いたマレー人の國であり、都はパレンパンとした。都をパレンパンに比定したのは、一三七七年頃のジャワからの攻撃の後「三佛齊」の都は「舊港」（＝パレンパン）と改稱されたという明史三佛齊傳の（誤った）記述に基づく當時の通説に従つたまでである。二年後にパレンパンでは初めての二つの碑文（クドゥカン・ブキット碑文とタラン・トゥウォ碑文、七世紀のシュリーヴィジャヤ碑文としては第三、四番目）が発見され、この説は強固になった。このセデス論文の最大の功績は、「室利佛逝」など外地文獻中の國名を、それまで王名と考えられていた「Srivijaya」に結びつけたことにあると言えよう。そしてセデスは現地資料とくに宗教的大建造物の稀少さを、シュリーヴィジャヤ王が交易支配に没頭し、宗教的價值を無視したゆゑと解釋した。

當初から大國として「再生」したこの國についてこれ以後多くの研究が發表されたが、それは概ね、セデス説の精密化（たとえば新発見碑文の解釋）か、一部分の妥當性（たとえば一一世紀半頃にジャンビに遷都）をめぐる行なわれた。その意味でこの一九一八年の論文はその後の研究の大枠を決定づけるものであった。

以後の研究は、個々の資料に關するものは別にして、地理的視野の廣狹によつて二つに分けることができよう。第一にアジアの視野。ここでは東西交渉史上のシュリーヴィジャヤの位置づけが問題になり、とりわけインドとの文化的交渉（いわゆるインド化の問題）と中國との經濟的交渉（朝貢貿易）が重要な位置を占める。現地中心史觀からインド化等々の問題を見直した、また沿岸交易國家と内陸農業國家という東南アジア史の國家の二類型を提起したファイン・ルールの學位論文が代表例であらう。後述のウォルタースの「リズム・オブ・トレード論」もこの範疇に入るであらう。

第二は東南アジア的視野。スマトラと東南アジア内の他地域とくにジャワおよびマレー半島との關係をめぐる論争が絶えない。とりわけスマトラ（シュリーヴィジャヤ）のジャワ支配説とジャワ（シャイレンドラ王家）のスマトラ支配説の論争が研究史上有名であるが、この論争は現在ではド・カスパリスのシャイレンドラ刻文の研究などを経て一應後者の説に落ちついているようである。また美術史の分野でスマトラ、マレー半島、ジャワのいずれに美術の中心を求めるか、三者の間の關係をどのように理解するかも重要なテーマである。中國資料の中の地名の比定に大きなエネルギーが注がれ、様々な假説が提出されているが、現地資料の比較的多い「室利佛逝」、「三佛齊」でさえマレー半島説（リゴール説、チャイヤ説）やジャンビ説等々の異説が根強く存在する。

この二つの範疇が相互に關連しあっていることは、たとえばインドとの關係を無視した美術史研究が無意味であることから十分理解しうる。さらには、シュリーヴィジャヤ史の編年史的再構成の内容の殆んどは事實上この二つの範疇から成り立っている。換言すれ

ば、シュリーヴィジャヤ自體の國家構造、社會構造とその變遷について我々の知るところは非常に少ない。

(2) ウォルタース

ウォルタースの一九六七年と一九七〇年の二著作は各々シュリーヴィジャヤの擡頭までの時期と滅亡の時期に重點を置きつつも、從來の研究を踏まえてシュリーヴィジャヤ史を集大成したものと見て、また近年の研究の盛況の基礎を据えたものとして見る事ができる。とくにセデスを含めてこれ以前の西洋の研究がベリオオその他の中國資料の研究、翻譯に依存していたのに對し、ウォルタースは中國資料を原典に則して研究している。ここに彼の研究が尊重される一因がある。

彼は七世紀にシュリーヴィジャヤが擡頭した背景を、西アジアから中國への香料の輸出が、それを代替しうるスマトラの香料の生産と輸出を促したことに求め、その入手と輸送におけるマレー人のイニシアティブを強調している。また、一二世紀に中國人商人が進出するまで、マラッカ海峡からスマトラ東南部の海域におけるシュリーヴィジャヤの支配力（治安維持能力）およびこれを尊重する中國皇帝の承認を得ていたことを強調し、この枠組の中のシュリーヴィジャヤ史の編年史的再構成を行なう。即ち彼の議論は、中國の政治的安定化が朝貢貿易の活潑化をもたらし、その場合にシュリーヴィジャヤ王を核とするマレー海洋世界の凝集力が顕在化し、逆の場合には擴散的になるとするリズム・オブ・トレード論である。

ウォルタースの著書に對してホールは⁽⁶⁾じめいくつかの批判が出ており、ウォルタースはこれを踏まえて一九七九年の論文で彼の著書

の缺點として次の八點を擧げている。(1)中國資料の地名比定が不十分である。(2)シュリーヴィジャヤと後背地との關係にもっと注目すべきである。(3)インド洋貿易にもっと注目すべきである。(4)東南アジア内部の貿易にもっと注意を拂うべきである。(5)朝貢の斷絶については中國の政治的動搖にもっと注意が必要である。(6)中國船の東南アジア來航の編年が不十分である。(7)スマトラの地形の變化に全く注目していない。(8)スマトラ—廣東間の航路はパラセル諸島の珊瑚礁を避けるためにチャンパ（中部ヴェトナム）沿岸を通ったと見るべきである。

これは彼の自己批判というよりも今後の研究課題の提起と見るべきであらう。ここで(5)(6)について一言述べておきたい(7)については後述)。リズム・オブ・トレード論の完成は中國の政治的動向もさることながら、消費市場（および生産市場）としての中國の社會經濟的發展との關連に求めるべきである。たとえば七世紀と一世紀の貿易の品目と量にかなりの違いがあっただろうし、それは中國經濟の發達（とくに江南の開發）を抜きにしては論じえないものである。(6)では東南アジア進出を擔った地域（たとえば福建）の社會經濟史の展開と關連づける必要があるだろう。(3)のインドの場合も同様である。この方向での研究によって中國、東南アジア、インドといった地域區分を超えた歴史の再構成への道が開けるかもしれない。

(3)(5)(6)はインド史、中國史の研究に依據する部分が大きいのでしばらく置くとしても、從來の資料と方法論ではこれらの課題に十分應じることは困難であらう。ウォルタースも同じ論文で、今後の展望は文字資料には多くを期待できないこと、考古學的發掘の進展と

自然科学も含めた新しい方法論の開発の必要なことを指摘している。

なおウォルタースはこの論文で、「三佛齊」は三つの「佛齊」(Vijaya)とするスレイマンの説に賛意を表わし、スマトラ東南部は廣東を向いていたとする自説を修正してインドージャワ航路を向いていたとし、また義浄の記した「莫訶信洲」の位置比定などを論じている。ここではこの三点には立ち入らないが、いずれも文字資料の再検討であり、その外、ムカ・ウパン問題(後述)や義浄の「末羅遊」は通説のジャンビでなくバレンバンに比定すべきことなど、文字資料の再検討の餘地の決して小さくないことを付け加えておきたい。

三 バレンバンの發掘——大國イメージへの

疑問と「マレー型社會」

文字資料再検討の餘地が大きいとはいえ、様々な異説を生じせしめる性格の外地文獻以外に現地の一〇世紀以前の文字資料即ち刻文は次のものしかないゆえ、今後の展望はやはり第一に考古學的發掘の進展に求めざるをえないであろう。

スマトラの刻文は六八〇年代(ないしその前後)の、「*Śrīvijaya*」の名前を記す碑文六點(三點はバレンバン、他はカラシ・ブラヒ、コタ・カプール、パラス・パセマー。本稿末尾参照)、同時期の断片的なもの約三〇點(いずれもバレンバン)、リオウ州カリムン島のバシル・パンジャンの七八世紀の岩壁刻文一點、ついで一〇世紀のものがランボン州西部に三點ある。マレー半島では五世紀のもの二點(ケダー州)とリゴール碑文のみである。

その他のスマトラの遺物で一〇世紀以前であることが明らかなのは、ムアラ・ジャンビの七八世紀の像數點、バレンバンの像一〇餘點、シマングンバット、タナ・アバン、ジャバラの三箇所建築遺構(いずれも中部ジャワ様式)の外、バレンバンのスグンタン丘の建築遺構(完全に崩壊している)に一〇世紀以前の可能性があり、ランボン州西部のバワンの土壘は刻文から見て一〇世紀のものと考えられる。土壘ではマレー半島のチャイヤ南方のウィエン・サとパタニ南方のヤラなどで一〇世紀以前のものが見つかっている。スマトラの中國陶磁器では一九七八年にスグンタン丘の近くと西スマトラ州のバルスで發見された唐末のものが最も古い。上記の土壘を除いて居住地遺跡は全く發見されていない。

スマトラでは七〇年代になってバレンバン、コタ・チナ、バルスなどで専門の考古學者による本格的な發掘調査が行なわれるようになり、一一世紀以降に關してはすでにかなりの成果を擧げているが、一〇世紀以前については未だ見るべき成果は殆んどない。

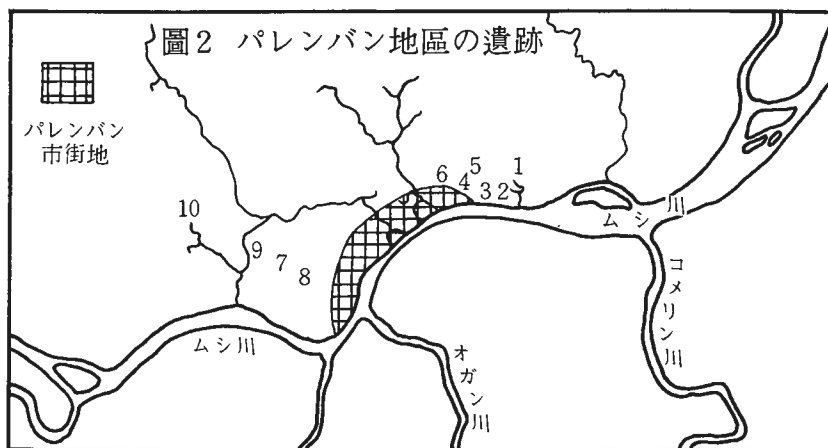
一九七四年ブロンソンの率いるペンシルベニア大學とインドネシア考古學研究センターの合同隊がバレンバンのグディン・スロ、アエル・ブルシー、サラン・ワティ、スグンタン丘の四地點で發掘を行なった。いずれも一〇世紀以前の遺物の見つかったところのある場所であるが、この發掘では一〇世紀以前の遺物は發見されず、これらの遺跡は居住地遺跡としては一四一一七世紀のものであることがわかった。

そこでブロンソンは七世紀の碑と六一一〇世紀の像は後代に他所からもたらされたものとみなし、考古學的にはシュリーヴィジャヤはバレンバンおよびムシ川流域には存在しなかったと考えざるをえ



ないとする。ここに文字資料と考古學資料の落差という一九一八年以來の問題が再び取り上げられ、ブロンソンはこれを、同時代には都市に見えたが現代の考古學者にはそう見えないものという問題に置き換え、そのような居住地は次の四要件を備えていたとする。(1)食糧を供給する後背地の缺如(それが存在するなら考古學的に發見可能である)。のちのマラッカがタイやジャワから食糧を得たように、海を越えて食糧を得ていたことになる。(2)交易の幹線に直結。(3)大陸部やジャワのような大規模で恒久的な宗教建造物をなしにすませる社會。それらは非定住社會には不要である。(4)考古學者に發見しえない方法でつくられる居住地。生活廢棄物をも考古學的に發見しえないゆえ、たとえば馬鹿がバレンバンで見た如き水上居住のような特殊な狀況を考えねばならない。⁽⁴⁸⁾

ブロンソンはさらに、後述の批判を知りつつ、一九七九年の論文で、スマトラの先史時代から一千年紀までの考古學資料の概略を紹介した上で、文字資料と考古學資料の矛盾の解決の方向を論じる。この矛盾は、外地の文獻や刻文によれば、シュリーヴィジャヤは少くとも六世紀の間存在したのに對し、スマトラの刻文によれば七―八世紀のせいぜい二五―五〇年間存在したにすぎないことに代表される。こうした矛盾の解決にはさし當り二つの方向が考えら



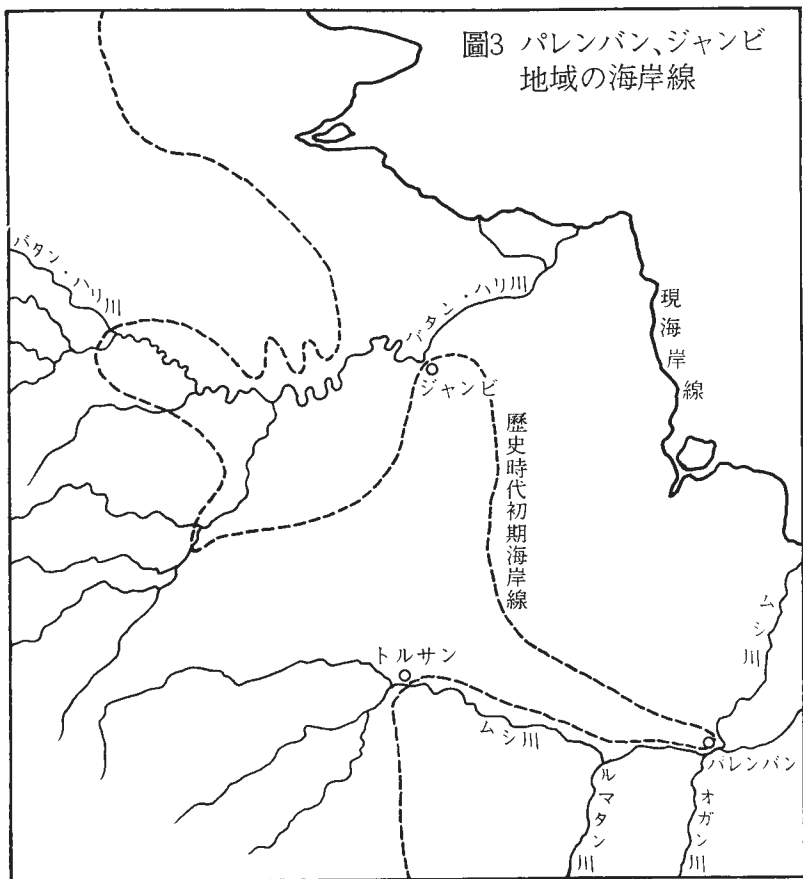
- | | |
|---------------------------|-----------------------------|
| 1 Telaga Batu | 6 Kedukan Bukit inscription |
| 2 Telaga Batu inscription | 7 Seguntang 丘 |
| 3 Geding Suro | 8 Kampung Bukit Lama |
| 4 Air Bersih | 9 Talang Kikim |
| 5 Sarang Wati | 10 Talang Tuo inscription |

れる。第一に、外地資料のシュリーヴィジャヤを幻想と見ること。即ち七―八世紀の數十年間シュリーヴィジャヤは實在したが、一〇―一二世紀の「三佛齊」や「Sriwijaya」は同じシュリーヴィジャヤではないと見る。リゴール碑文とチョーラ刻文に「Srivijaya」が刻まれているが、同じ名前は實體の繼承を必ずしも意味しないと考える。第二の方向は勿論、發掘が未だ不十分であることを強調することである。しかしブロンソンは、文字資料からシュリーヴィジャヤの都に十分比定しうるパレンバンにおける發掘の結果に照らして、今後スマトラで大規模な建築遺構や九―一〇世紀のシュリーヴィジャヤ刻文が發見される可能性はないと考える。さらに他地域からの大規模な食糧供給の證據も、スマトラ内陸におけるそのような農業の發達の證據もないゆえ、九世紀から一〇世紀（さらには一四世紀）までシュリーヴィジャヤはスマトラにはなかったと彼は甚だ否定的である。

そしてブロンソンは大國イメージの放棄を主張する。即ちスマトラ沿岸の霸權は一〇―一二〇年位の間隔で轉々と移動し、この多くの遺跡を残さない短命の權力の連續の總體が外地資料に見えるシュリーヴィジャヤであったとする。

確かに一九一八年以後大國イメージを補強する新資料は少なく、密林の中から大建造物が發見されるという期待は今日では幻想にすぎない。また文字資料から單一の王朝や體制が連綿と續いたと考えるべき必然性はない。それゆえ考古學資料の現狀を前提とする限り、大國イメージは放棄しないまでも、大幅な修正が必要であろう。とはいえ當然ながら、ブロンソン論文に對して、四箇所（の發掘では不十分とする批判が提起されている）。

圖3 パレンバン、ジャンビ
地域の海岸線



まずウォルタースが一九七五年の論文で批判を發している。この論文は、ブロンソンがパレンバン最古の居住地遺跡で一四一—一五世紀のものとしたアエル・ブルシーを明の洪武帝の海禁政策を避けて東南アジアに渡った中國人の居住地と推定し、「舊港」の正確な位置を水路の變化と関連づけて論じている。また新唐書卷二二二下驛傳と宋史卷四八九注聲傳に見える旅程についても論じているが、これらについてはここでは取り上げないことにする。

ウォルタースはムシ川南岸地区の發掘を行なうべきだとする。とくに七—八世紀の三點のブロンズ像が出た、コメリン川のムシ川合流點からあまり遠くない地區、および、食糧供給後背地であった可能性のある地區として、オガン川のムシ川合流點から約二五キロメートルの間。また方法論上の問題として

スマトラ東海岸の海岸線の變化の地形形態學的編年をまず確立すべきであるとする。

ウォルタースの既述の一九七九年論文中的(7)はこの地形形態學的研究を指しているが、これは明らかにオブデインの影響を受けている。オブデインによると歴史時代初期(約二千年前)の海岸線は圖3のように推定され、バレンバンは岬の先端に位置していたことになる。オブデインの地形形態學的研究はスクモノとサルトノに繼承されている。私が讀んだ一九七九年の二人の論文は短いものであるが、結論はオブデインと同じである。私には二千年間に沈泥によってこれだけの陸地形成があつたとは信じ難い。バレンバンからムシ河口スサンまで約九〇キロメートルあり、少くとも一年平均四五メートルの陸地形成があつたことになる。單に感覺的に信じ難いというだけではない。オブデインの説は主として一九世紀と二〇世紀の地圖や地誌の比較から陸地の著しい生長を認め、この視點から古い文獻や地圖を解釋することに基づいており、土壤分析などの自然科学的方法に基づいているわけではない。さらに、この結論に従うなら、第四紀の洪積世(百萬年前に始まる)とは言わぬまでも沖積世(一萬年前に始まる)がスマトラでは二千年前に始まることになつてしまふ。またスサンで明代とスワンカロクの陶磁器が発見されており、バレンバンとスサンの中間のウバンは七世紀に存在したと考えることができ(後述)、ウォルタースもこの二點を踏まえて一九七九年論文ではオブデイン等の地形形態學的結論にはいささか懷疑的になつていられるように見受けられる。とはいへ、この説を否定するためにも、また歴史時代にある程度生じたであろう陸地の變化を明らかにするためにも、自然科学的方法に基づく、その編年史

確立は無益ではない。なお、七世紀の海洋國家が海のごく近くにあつたと考える必要はない。むしろある程度河を溯つた所にある方が、モンsoon待ちの滞在や外敵からの防衛のために安全有利であつただろう。

發掘の不十分なことを強調する立場の代表的なものにマッキノンの一九七九年の二つの論文がある。その前年にバレンバンを訪れたマッキノン、ウォルタース等のチームがスグンタン丘とその西のタラン・キムで地表面採集によつて唐末の陶磁器を発見しており、それゆえ一〇世紀以前の居住地遺跡を発見する可能性があるととして、これらの地點を徹底的に發掘すべきだと主張している。この主張は偶然の發見にのみ基づくのではなく、バレンバン地區でムシ川北岸は洪水に浸ることのない土地であり、その内部や周圍にクリリクや小川のネットワークがあり、またその周圍のたとえばスグンタン丘(高さ約三〇メートル)北西方の濕地帯には微高地が點々と存在し、これは「マレー型社會」の適地であるという考えに基づいている。その社會は恒久的建造物をあまり残さないものであり、「都市」というより、王宮と市場を中心に(また宗教センターのまわりにも)、水路に沿う、周圍より幾分人口集中的という居住様式を持つ。主な交通手段は船である。これは先のブロンソンの四要件のうち(3)と(4)に通じる考え方であり、この點に關する限り二人の間に大きな違いはない。ただし、ブロンソンが數百年間にわたる都にふさわしい生活の痕跡を発見する可能性を否定しようとするのに對して、マッキノンはマレー型社會におけるシュリーヴィジャヤの都の位置を明らかにするための手掛りは像(宗教活動)、刻文、住民の傳承、生活の痕跡の四者に求めるべきであり、前三者の點でバレン

パンには十分資格があると論じ(ただし傳承は一四世紀を溯らない)、唐末陶磁器の發見のゆえに一〇世紀以前の生活痕跡發見の可能性があるとする。

バレンパン地區には一二世紀以前の居住地遺跡はないとするブロンソンの結論はまだ早すぎるように思われる。タラン・トゥウォ碑文の出土地附近も發掘すべきであらう。またブロンソンは他地域からの食糧供給の證據はないとしているが、中部ジャワに七世紀初めから九世紀前半の間のマレー語碑文が少くとも五點存在しており、スマトラと中部ジャワの間にかなりの交流のあったことを示唆している。

次に遺跡の年代決定と發掘技術の問題に觸れておきたい。インドネシアの考古學の歴史を振り返って見れば先史考古學よりも歴史考古學に重點があり、地域的にはジャワに偏っていることが明らかである。それはジャワの多數のチャンディ(古代の石や煉瓦造りの宗教建造物)、像、刻文に眼を奪われたからであらうが、それゆえにこれらの「物」が中心的位置を占め、家屋跡や水田跡などは事實上無視されてきたと言える。王宮跡でさえ一四世紀のマジャパイトの發掘以外では、わずかに九世紀後半の王宮と推定されるラトゥ・ボコ丘の石造りの遺構が知られているにすぎない。それでもジャワでは多數の「物」(とくに七一五世紀の刻文約一三〇〇點)による一應の編年史再構成が可能である。しかし「物」の少ないスマトラでは、單に發掘例の増加ばかりでなく、新しい發掘方法の開發がジャワ以上に必要である。七〇年代の發掘が居住地遺跡の發見をめざしているのは當然の方向である。その際生活廢物が遺跡の存在自體とその年代決定の手掛りにされているが、それが事實上中國陶磁器

の破片であることに問題がある。マッキノンも指摘しているように中國陶磁器が大量に東南アジアにもたらされるのは宋代以後であるから、この方法では一〇世紀以前についてはあまり期待が持てない。したがって現地製土器の(相對)年代決定の方法の開發が必要であり、そのためにも多數の發掘例が必要である。しかしより重要なことは、チャンディ以外は木と竹でできていたから發見不可能とする傳統的態度を改めることであらう。たとえば日本の、刷毛や更には霧吹きを用いる發掘作業、水田跡や更にはその中の足跡まで發掘してしまう方法、いわば「泥の考古學」の導入が必要であらう。日本の方法をそのままインドネシアに導入するのは無理があるとしても、マレー型水上居住社會でも乾いた陸地にも建物があったであらうし、一〇世紀以前の「物」をめざすよりもマレー型社會における「泥の考古學」の樹立の方が現實的であらう。

なおマッキノンのマレー型社會の概念内容は必ずしも明確でなく、彼自身その居住様式の検討の必要性を説いている。ここに社會學、人類學と歴史學との一つの接點があると思われる。マレー型社會との關連で前掲のウォルタースの一九七九年論文にいくつかの示唆がある。彼はバレンパンの景觀との關連で議論を展開しているが、これは前年に初めてバレンパンを訪れたことが契機になっており、歴史研究者の現地訪問の必要性和有効性を示している。その場合、考古學者、農學者等々の参加が望ましいのは當然である。

ウォルタースによれば、バレンパンのような非水田社會では人と土地の結合が弱く、土地と人々をチャンディ即ち神に寄進すること(これは神と王の間、王と人民の間の二つの精神的價值を統一的に表現している)はおこらない。したがって今日の我々にも可視的な

チャンディヤこれへの土地と人間の寄進を記す刻文（ジャワの刻文の約九割はこの寄進を記す）は存在しない（殆んどない）。しかしこのことはセデスの言うような精神的價値の無視を意味しない。ジャワではチャンディと刻文が精神的價値を體現していたが、スマトラではそれは國家の河川交通であつたと考えられる。王の勅命命令などを傳える船は何らかの王の印を用いていたであろうが、そこに當時は可視的であつたが現在では不可視の王と人民の間の共通の價値の現れを見ることができるとウォルタースは考える。またウォルタースによれば一九世紀に擢の船はバレンバンからムシ河口まで引潮の場合二、三時間て到達し、パリサン山地のパセマー地区には一日間のオガン川溯行と陸路一日で到達していた。

河川を中心とする内陸部の交通網地圖を作成し、これを參考に「泥の考古學」による居住地遺跡の發見と人文的調査による傳承、方言等々の資料採集が行なわれることによつて新しい展望が開けるかもしれない。河川ばかりでなく沿岸部の航路網の研究も必要である。たとえばリオウ諸島での調査によると、そこからカリマンタン西方のナトゥナ諸島へは直航できず、一旦スマトラ南部かジャワ方面に寄らねばならない。海洋國家シュリーヴィジャヤの實像に迫るにはこのような調査の積み重ねが必要であらう。この意味でも次に敘べる五箇年計畫は大いに注目される。

四 五箇年計畫

「東南アジア文部大臣會議」の下部組織「考古學、美術プロジェクト」が一九七九年三月ジャカルタにおいて「シュリーヴィジャヤ研究ワークショップ」を行ない、とりわけシュリーヴィジャヤ當事

國であるタイ、マレーシア、インドネシアの協力のもとに、今後五年間に行なうべき大がかりなシュリーヴィジャヤ研究計畫を定めた。一四〇頁を超えるこのワークショップの報告書を詳しく紹介する紙數はないので、五箇年計畫の骨格のみを記すことにする。考古學に重點を置き、自然科學を含め廣く諸科學の方法論を動員して、可能な限りの材料を集め、分析しようとするもので、七つのプロジェクトから成る。

(1) 研究文獻目錄作成。英文以外のものには要旨を附ける。

(2) 考古學的、環境學的研究。衛星寫眞、地表面調査、水中調査、土質分析、動植物調査等々によつて遺跡目錄を作成し、發掘を行うべき地點を選定する。發掘には考古學者以外に關連諸科學の専門家も参加する。發掘地の土壌、地層の調査を並行して行ない、「物」以外に居住様式や農業水利技術の研究も行なう。具體的に決まっている發掘地はスマトラではコタ・チナ、バルス、ムアラ・タクス、マレー半島ではチャイヤ、サティンブラ、タクアバ（以上タイ）、クランタン、トレンガヌ、バハン（マレーシア）。

(3) 美術史研究。目錄作成、圖像學的研究、チャンディの様式、建築技術、裝飾の研究。美術および宗教の發達を明らかにし、地域内におけるまた地域外との關係を明らかにする。

(4) 古地名の研究。文字資料中の地名のリスト、現在の地名のリストの作成。中國資料中の日時記事の研究。

(5) 中國資料の研究。原典の收集、英譯、比較研究。

(6) 交易と航海。シュリーヴィジャヤ文化の海洋的基礎とその地理的境界、東南アジア產品の輸出を可能にした交換システム、非東南アジア產品の交易におけるシュリーヴィジャヤの役割、住民自身の

交易参加の程度、造船技術などの研究。あわせて海上航路および現地産交易商品の形式と産地の歴史地圖作成。

(7) 文化人類學、民族言語學。傳承と信仰體系、諸地域の文化的特徴、海洋關係語彙、交易商品生産者、河川・沿海文化、社會組織の諸様式、民族言語學などの資料収集と研究。

いずれも詳細な報告書が作成されることになっている。

これが計畫どおり實施されれば、シュリーヴィジャヤ史ばかりでなく東南アジア史全體に、また歴史學ばかりでなくその他の研究分野にも一大劃期をもたらす可能性があり、成果に期待したい。

最後にプハリの刻文研究に觸れておきたい。上記のワークショップおよびこれに先立ってインドネシア考古學研究センターが一九七八年一二月に行なつた豫備會議⁽⁹⁾においていくつかの研究が發表された。その中で最も注目されるのが、プハリの七世紀のシュリーヴィジャヤ碑文六點の研究である。いくつかの重要な見解が提起されているが、とりわけ論争の的になつていたクドゥカン・ブギット碑文⁽⁹⁾（六八二年）七行目末尾の、從來 *matajap, malayu, matadanau* などと讀まれていた部分をムカ・ウバン *mukhaupang* と解讀するのに成功し、これをバレンバン下流約四五キロメートルの微高地ウバンに比定したことが重要である。これによつてこの碑文の遠征の行程をめぐる論争は終息に大きく近づき、今や六八二年に他所から遠征してきたシュリーヴィジャヤがウバンを経てバレンバンに新しい都を置いたことがほぼ確定したと言つてよいであらう。ただし私は遠征の出發地ミナーナをバタン・クアンタンに比定するプハリの説には賛成できない⁽⁹⁾。それはともかく、これによつて六碑文の解讀で殘された最大の問題は不明のいわゆるB言語の解讀ということに

なる。クドゥカン・ブギット、タラン・トゥウォ兩碑文はマレー語で記されているが、他の四碑文にはマレー語部分の前にB言語で記される同文の文章がある。これについてプハリは、四碑文のマレー語部分と同じ趣旨（神々への呼びかけ、シュリーヴィジャヤ王國ないし王に忠誠でない者への呪咀、忠誠である者への祝福）の内容であらうと推測し、マレー語は各々の土地の住民の言語、B言語はシュリーヴィジャヤ支配者の言語とする見解を示している。とすれば、シュリーヴィジャヤは非マレー語世界から進出してきたことになる。それともB言語は標準的マレー語ではない方言なのであらうか。B言語の言語學的同定が待たれる。

註

- (1) 現地資料によればシュリーヴィジャヤは一三世紀後半以後ジャワのシンガサリ、マジャパイト兩王朝の支配下に入つたと考えられるが、「三佛齊」がジャワによつて最終的に滅ばされるのは一四世紀後半である。
- (2) 戦前の研究史を知るのに N. Sastri 1940, 近年の動向を見る G. Wolters 1979 が便利であらう。
- (3) G. Coedès 1918.
- (4) Van Leur 1955 にその英譯がある。
- (5) De Casparis 1956 and 1956.
- (6) Wolters 1967 and 1970.
- (7) Pelliot 1904.
- (8) Hall 1976.
- (9) Wolters 1979.

(10) スレイマン説の詳細は私には不明であるが、明史卷三二四三佛齊傳の中に「時其國有三王」とあるのに基づいているように思われる。そうだとすれば、前後の文脈から見て「有三王」は洪武六年頃の状態を指しているように思われ、したがって宋代の三佛齊まで溯らせることはできないように思われる。

(11) 深見 一九八一年。

(12) Bronson 1979, pp. 339—400. 参照。カリムン島の刻文の全文の轉寫、翻譯はまだ發表されていないようであるが、Diskul 1980 pp. 16—17 参照。なお一九八一年八月にタイに行かれた京都大學東南アジア研究センターの石井教授によると、近年リゴール碑文と同じ場所から同じ時期の刻文が発見され、「Srivijaya」なうし「Srividaya」と記されているとのことである。

(13) Bronson 1979, pp. 400—402. など Diskul 1980 (『東南アジア——歴史と文化』一〇、一九八一年に書評あり) にギャラリーヴィジャヤ関係地域の遺物の寫真が多く収められており、各々に解説がついている。圖1は本書二三頁より轉載。

(14) プー半島の遺物、遺構について Diskul 1980 をよむ Wales 1974 参照。

(15) McKinnon 1979 a and b; Ambary 1979.

(16) スマトラの七〇年代の發掘の概略については McKinnon 1979 a; Ambary 1979 参照。コタ・チナの發掘と歴史的背景については McKinnon 1978 参照。

(17) Bronson 1976.

(18) *ibid.*

(19) Bronson 1979.

(20) Walters 1975.

(21) Obdeyn 1941. 圖cは第一章の第3圖より作成。

(22) Soekmono 1979; Sartono 1979.

(23) McKinnon 1979 a, p. 8.

(24) McKinnon 1979 a and b.

(25) ジャバのプー語刻文の意味については Krom 1931, p. 155; De Casparis 1956, pp. 207—211; Boechari 1966, p. 242 参照。

(26) McKinnon 1979 a, p. 12.

(27) 京都大學東南アジア研究センター客員研究員ラビアン博士 (Dr. A. B. Lapien) の談話 (一九八一年七月、京都)。

(28) Southeast Asian Ministers of Education Organization (SEAMEO, 一九七六年結成)。

(29) SEAMEO Project in Archaeology and Fine Arts (SPAFA, 一九七八年成立)。

(30) SPAFA 1979.

(31) 上の報告書が Pra Seminar 1979.

(32) Boechari 1979. したがってカ・マンンについては同じには敘ぐらばならない。SPAFA 1979 中の彼の報告が發表された。

(33) 上の碑文をめぐる論争は Cordes 1964 参照。

(34) 深見 一九八一年。

BIBLIOGRAPHY

Ambary, Hasan M.
1979 "Catatan tentang penelitian beberapa situs 'masa' "

Srivijaya", *Pra Seminar*, pp. 7-17.

Boechari.

- 1966 "Preliminary report on the discovery of an old-Malay inscription at Sodjometro", *Madjalah Ilmu-Ilmu Sastra Indonesia*, vol. 3, no. 2/3, pp. 241-251.

- 1979 "An old Malay inscription of Srivijaya at Palas Pasemah(South Lampung)", *Pra Seminar* pp. 19-40.

Bronson, Bennet.

- 1976 Bronson and Jan Wisseman, "Palembang as Srivijaya: The lateness of early cities in southern Southeast Asia", *Asian Perspective*, vol. 19, no. 2, pp. 221-239.
- 1979 "The archaeology of Sumatra and the problem of Srivijaya", Smith and Watson (ed.), *Early South East Asia*, New York and Kuala Lumpur, pp. 395-405.

Cœdes, G.

- 1918 "Le royaume de Srivijaya", *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient*, vol. 18, no. 6, pp. 1-36.
- 1964 "A possible interpretation of the inscription at Kedukan Bukit (Palembang)", Bastin and Roolvink (ed.), *Malayan and Indonesian studies*, Oxford, pp. 24-32.

De Casparis, J. G.

- 1950 and 1956 *Prasasti Indonesia*, 2 vols., Bandung.
- Diskul, M. C. S.
- 1980 (ed.) *The art of Srivijaya*, Kuala Lumpur, 68pp.

with pls. in total 176pp.

深見純生

- 1981 「七世紀のシュリヴィジャヤとマラヤ」『南方文化』No. 8.

Hall, K. R.

- 1976 "State and statecraft in early Srivijaya", Hall and Whitmore (ed.), *Explorations in early Southeast Asian history*, Michigan, pp. 61-105.

Krom, N. J.

- 1931 *Hindoe Javaansche Geschiedenis*, 2nd ed., The Hague, 505pp.

McKinnon, E. E.

- 1978 McKinnon, A. C. Milner and S. H. T. L. Sinar, "A note on Aru and Kota Cina", *Indonesia*, no. 26, pp. 1-43.

- 1979a McKinnon and Milner, "A letter from Sumatra: A visit to some Sumatran historical sites", *Indonesia Circle*, no. 18, pp. 3-21.

- 1979b "A note on the discovery of spur-marked Yueh-type sherds at Bukit Seguntang, Palembang", *Journal of Malayan Branch of the Royal Asiatic Society*, vol. 52, pt. 2, pp. 40-47.

Obdeyn, V.

- 1941 "Zuid-Sumatra volgens de oudste berichten", *Tijdschrift van het Koninklijk Nederlandsch Aard-*

rijskundig Genootschap, vol. 58, pp. 190—216, 322—341 and 476—502.

Pelliot, M. P.

1904 "Deux itinéraires de Chine en Inde à la fin du VIII^e siècle", *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient*, vol. 4, no. 1/2, pp. 121—413.

Pra Seminar

1979 *Pra Seminar Penelitian Sriwijaya*, Jakarta, 7-8 Desember 1978, Jakarta 144pp.

Sartono, S.

1979 "Pusat-pusat kerajaan Sriwijaya berdasarkan interpretasi paleogeografi", *Pra Seminar*, pp. 43—73.

Sastri, K. A. N.

1940 "Sri Vijaya", *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient*, vol. 40, no. 2, pp. 239—313.

Soekmono, R.

1979 "Sekali lagi tentang lokalisasi Sriwijaya", *Pra Seminar*, pp. 75—83.

SPAFA

1979 *SPAFA final report, Workshop on Research on Sriwijaya*, Jakarta, March, 12-17, 1979, n.p., n.d. (Bangkok, 1979), 142pp.

Van Leur, J. C.

1955 *Indonesian trade and society*, The Hague.

Wales, H. G. O.

1974 "Langkasuka and Tambralinga: Some Archaeological Notes", *Journal of Malayan Branch of the Royal Asiatic Society*, vol. 47, pt. 1, pp. 15—40.

Wolters, O. W.

1967 *Early Indonesian commerce: A study of the origins of Sriwijaya*, Ithaca, 404pp.

1970 *The fall of Sriwijaya in Malay history*, London, 274pp.

1975 "Landfall on the Palembang coast in medieval times", *Indonesia*, no. 20, pp. 1—57.

1979 "Studying Sriwijaya", *Journal of Malayan Branch of the Royal Asiatic Society*, vol. 52, pt. 2, pp. 1—32.